
時を狩る少年

鬼崎 杠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時を狩る少年

【Nコード】
N9011L

【作者名】
鬼崎杠

【あらすじ】
自分のため、家族のために時の欠片を集める月光。
止まった時は再び動くだろうか。

第1章・そして少年は運命に抗う・

俺は今の生活が嫌いじゃない、むしろ好きだ。

例えば姉が暴走して自分に襲い掛かってきたとしても…まあ、それはまた今度考えよう。

とにかく、今の生活が続けばいいな」と漠然と考えていた。

だけど、何の因果か知らないけどおれの家はそんな時間を長続きさせてもらえなかった。

どうしてこう、よりにもよって、おれの家じゃなきゃダメだったのかとかは思った、だけどそれも無駄だった。

だから僕、俺は――。

「ふぁーあ…」

あくびをして起きた少年は月光、って自分のこと言っても仕方ないよな

「…寝れるな、寝ようかな」

「月光ー？起きてるか？」

「あー起きてるー」

こりゃ二度寝は中止かあ…

月光と呼ばれてるおれのフルネームは久遠時月光くおんじげつこう、容姿は普通。至って普通なんだが…友人に言ったら怒られた、理不尽だぜ。

身長は173cm？体重なんて知るかつ。

やせてはいると信じている。

黒髪で短髪、とは言っても目にはちよいとどかないくらいだが。

そしてメガネをかけてる、伊達だけだな！なんかかつこいいじゃない。

ちなみに暑がりとか言われてる、いいじゃないか一年中半そででも、作者だつてそーなんだし。

おっと一瞬異次元の言葉がまぎれこんでしまったようだ…危ない危

ない。

「漆姉ー、暦姉はー？」

今漆姉と呼んだ人物はおれの姉の久遠時漆。くおんじうるし

成績優秀で容姿は抜群であるものの、性格に難在りと言われている。実際は面倒見がよくて優しいのになア…

おれと同じ黒髪で、漆姉は腰までときそつな長髪である。

目は友人いわく「DSの目みたいで見られてるとゾクゾクする」らしい。

なんでも学校では漆姉に踏まれたい奴もいるんだとか、こわいこわい。

下ネタは苦手、暦姉に言われてよく顔を真っ赤にしたりする。

本気で切れるとマジで怖い、本気って書いてマジと読む。

あとなんか自分がく自分もく口調。

「寝てた」

短めに言ってます、流石漆姉だぜ。

…何を言いたいんだらうおれ。

「起こさないとダメ？」

「あれはダメだな、起こしてきて」

「あいしゃいつと」

そういつて駆け出そうとして気づいた、着替えよう…

がちやつ

そーつと入ってみる。

…相変わらず散らばってるなあ、おれの部屋より散らかってるよ。

「おーい暦n…」

し、縞パンだと…！

ということだ、ということは…！

暦姉…下に何もはいてない！？

どうすりゃいいんだよお…！

「月光ー月光だぁーうへへー」

あろうことかいきなりくつついてきやがった…

「な、なにをするだぁー！」

もちろん必死に抵抗したさ、したんだよ

「んふふー」

「ちょ、くつつくな…！」

もつとくつつかれたんだよ…しかもやわらかいから困る

どこがって、言わなくてもわかる…よな？

「えー」

「えーじゃないわい！」

「お姉ちゃんまだ眠いんだよー、だからそれを妨害する悪い弟君はこつだ！」

寝ぼけて身包みを剥がれるだなんてとてもいやだ…誰だつて抵抗する、おれだつてそーする

「ぎゃ、ぎゃぁー！」

「よいではないかーよいではないかー」

よくねえ！よくねえよ！

「助けてー！アンパン。ーン！」

「…何してんの？」

そこに来てくれたのは漆姉だった

「う、漆姉…助けて」

「やつほー漆ちゃん、弟君が可愛くて仕方ないんだよッ！」

ハア…と漆姉がため息をひとつ

「なるほど、寝ぼけてるのか」

飲み込み早くて助かつちゃうなあ…

「そ、そういうわけ…」

というか！地味にさつきからおれの身包みを剥ぐとししないで！

「とりあえず曆姉、身包み剥ぐのやめれ…」

「仕方ないなあ弟君は、可愛いからこうしてやるっ！」

うぼっ！？

「……！？んーもぐーんぐうー！」

「ひゃん♪そんなに胸の中で喋っちゃダメだよ弟君」

胸……胸が……！息が苦しい！

「胸、か」

漆姉！！黄昏でないで助けてー！

「いーいーいーいー」

あ、ちよ、そんなに押し付けると……

「ぐふつ」

ガクツ

おれはノックアウト(?)された

「あるえー？弟君が動かなーい、おかしいーあははー」

「げ、月光——！！」

漆姉はようやく気づいてくれておれを解放したとさ……

[illegible]

とまあこんな感じでとてもいいわけ…でもあつたけどどっちかと言
うと悪い思い出があるので…警戒はする！

「だけでもあゝ相変わらず起きねえなおい」

さっき返事したのに……いびき掻いてるし……

「いやん、弟君たら大胆♪」

どんな夢見てるんだよ……

とりあえずペシンと一発

「うーん」

「それでも起きないとは……いつもどおりか」

うん、いつも通り。なんかむなしいなあ

「えへへー」

「夢で照れるな！」

まるで会話するかのごとく寝言言つなよな……

ゴロツ！

そのときだった…暦姉が、布団を思いつきり蹴り飛ばしたのは「ぶっ！？」

その言葉と共に鼻血が出ておれは倒れた…

姉が…ノーパンだって忘れてた…

——またまた経つこと数分。
いや、数十分…。

ペシペシ、ペシペシ

「げ……う」

ペシペシペシ

「げ……こう？」

ベシッ

「ぐふっ」

ぐおお…いたい…

「月光つてばー！」

…あれ？何が一体あったんだ…？

「ん？暦姉？」

ここどこ？

…暦姉の部屋か、あるえー？

「何あったんだ？」

質問したら暦姉がぷーと頬をふくらまして言う

「知らないよー、起きたら月光が鼻血出して倒れてるんだもん」

えー、と？よくわからないが倒れてたのか…んで暦姉がおれが倒れた音で起きたと、多分。

「とりあえず悪かった、なんでかは忘れたけど多分倒れたのはおれ

の自業自得だ」

「えへへーまあ起こした代わりに月光のかわいい寝顔が見られたからいいかな」

「かわいくねえよっ、たく…」

そういつてさり気なく時間を見る

「げっ」

「んー？どうかしたのー？」

「そのの、ほれ」

「そののだけじゃわからないよー教えてよ！」

今度は指を指してちゃんと言う

「そのの、目覚まし時計の時間見る」

「はーい」

そう言つて枕元の時計を見る

「あちやー、こりや朝飯抜きだねっ」

「軽く言うなあ！朝飯抜きつてつらいんだぞお！？」

腹へつて授業動く気がしないぞ…

そんなことを考えていたら暦姉がこんなことを言い始めた

「それならおにぎりを食べばいいよ！おにぎり！」

その手があつたな、普通に失念してた。

「そうだな…おにぎりにするか、漆姉には悪いけどおにぎりを作つてもらうか」

「なんなら私作つてもいいんだよ？」

こんな提案をするがおれは知っている、というか味わっている。

暦姉は家事全般が苦手だ、それも極悪に。

皿を洗わせたら何故か泡は水で流さないし、掃除したらめんどくさいと言つて途中で投げてちらかったままになるわ、終いには料理をさせたら分量を間違つてパッサパッサの飯を作るわけで酷い…正直暦姉はずつとこの家になきゃ餓死というか人生過ごしていけない

んじゃないかと思う。

そして一度おれは曆姉の手料理を食ったことがある。

あれは多分ラーメンだったはず、何故か黒かったから何入れた？と聞いたらあの姉は「ココア入れてみたんだー」とか言ってたし。まあ毒を食わらば皿までとか言っし完食したがおれの腹は殉職した。

「いい、曆姉は寝起きなんだから着替えておけよー」

「きゃっ、仕方ないなあ弟君は」

何を勘違いしたのかこの姉はおれがいるのに着替えを始めようとした！

「待て待て待て、おれがいる前で着替えるなよ！」

「ぶー、今のつて「曆姉の着替えを見たいな」って意味でしょー、なんで怒ってるのー」

「怒るといつか止めるのは当たり前だろ…おれだつて男なんだ、やめてくれ」

なんとなく恥ずかしくなり顔を背ける。

後ろでえへへーという曆姉の声が聞こえる、ちくしょう話題変換してやる。

「そいや、おれ起こす時月光って呼んでなかったか？」

「気のせいじゃないかな」

こんなことをしてて本当に一つ気づいてしまった。

「…あ」

「どうしたのかな弟君？」

「…遅刻ダナー」

ひゅー…

沈黙が流れる

「あはっ」

「やっちまったああああ！」

それから急いで階段を降り…ようとして気づく。

「暦姉」

「何かなー？」

「着替えろ」

「あはっ、そうだねー」

…3分後…

さて、おれは男だからさっさと着替え終わったが…暦姉は、と。

「弟君遅いぞ」

「相変わらずあんたってか暦姉ははええな…どんなマジックだよ」

「この世は不思議がいっぱいなんだよ？」

まあたこの姉は…少しは漆姉を習ってほしいもんだ…

「とにかく、もう遅刻だし諦めて朝飯食ってこう」

「うん、そーしょっか」

朝飯は…おにぎりか。漆姉は超能力者か！？

…冗談は良子さん、さて飯食おう。

「あ、暦姉。筋子おにぎり食ってくれ」

「仕方ないなー」

「半分以上アレルギーなんだから仕方ないだろ、臭いだけでも吐けるんだ」

聞いたことがあるだろうか、筋子という生き物（？）を！

あの！臭いがおぞましいモノを！初めて口にした時、おれは地獄を見た…

「ほれ、さっさと食った食った」

「はいはい」

「はいは一回でいいよ」

「了解しました隊長殿！」

ビシッと効果音のつきそうな音で敬礼を何故かする、いや実際自分の頭に手を思いつきりぶつけてるから痛そうだけど。
その時！誰かが背中から迫ってきた！

「なんだー？お前らまだ学校行つてなかったのか」

そう、おれたちの最大の敵…！

「いやいやなんだそのナレーション」

「…心読むなよな、親父」

「おふあよーおひょーひゃん」

「暦姉はちゃんと食べ物飲み込んでから喋れ」

ごくつ、暦姉はハムスターのようにたくわえてた飯を一気に飲み込んでから言い直す。

「おはよーお父さん」

「ふあーあ、おはよう暦。ついでに月光」

相変わらずついでかこの親父！とツツコミたくなつたけど我慢我慢。
この今挨拶した野…人はこの家庭の父親、くあんじこつてつ久遠時鋼鉄…ふつ、変な名前。

なんでも親が変人でロボットが好きだからこんな名前がつけられた
そうだ、鋼鉄だつてお！

まあかなりのバカ親、おれに対してだけは多少厳しいが男だから仕方ない。

親父くさい容姿をしている、実際に親父だけど。

中々怒つたりしない温厚な性格。

名は人を表すと言うらしいけど、うちの親父はまさにそれを体言している。

無駄に筋肉が締まっていて、強い。

一度なんでそんなにつえーんだよと聞いたことがある、親父は軽く

こう言い放ちやがった。

「生まれつきさ」って、努力してる癖に変なところで隠すのな…
そこで誰かに話しかけられて意識が現実に戻ってくる。

「ところで月光」

「…ん？ああ、なんだ親父」

「忘れもんだ、受け取れ」

ひょいっと親父が物を投げる、なんか忘れたっけか？

投げられた物はちゃんとキャッチする。チャリ、と音が鳴る。

「ああ、なるほど…忘れてたな…」

投げられた物は、懐中時計。

初めて親父からもらった、誕生日プレゼント。

古いけど、変に新しい物よりはよっぽど大事な物だ。

ちゃんと親父に礼は言っておくか。

「ん、どうも」

「気にするな」

「弟君弟君」

なんか目を輝かせながら姉が近寄ってくる。

「ん？触らせないぞ？」

「違う違うー、お父さんにちゃんとお礼言う弟君久しぶりに見たからちよっとお姉ちゃん感動しちゃった！」

この姉は色々と得な人生してそうだな…ハア。

「そいや親父、霧夏は？って…今起きたんだっただな」

「お姉ちゃんスルー！？ひどいよ弟君っ」

「あー裂に聞けばわかるんじゃないか？」

「…しくしく、おねーちゃん悲しいなー」

だ、だるい…この姉だるい。

まあとりあえず霧夏は学校に行ってるだろうし、おれたちもそろそろ出なきゃな。

「霧夏ももう出ただろうしそろそろおれたちも学校に行くよ。ほれ、行くぞ曆姉」

「ぶー」

ところがどっこい動かない姉（精神年齢は妹以下）

「あー悪かった、悪かったから早く学校行こう」

「えへへーそれじゃあ手つないで学校行こー！」

「んなつ」

絶句しそうになったおれより先に親父は口をはさむ

「お父さんはそんなことは許しませんッ！」

「ちえー、仕方ないから腕でいいよ弟君」

「全然妥協してねえだろ！？」

「あははーバレちゃった」

そう言つて曆姉はおれの腕を引つ張つて家を出てった。

「行つてきまーす！」

「月光！帰ってきたら特訓だぞこの野郎ー！」

親父の声が聞こえるけどもう遠い…

「…はあ」

そしておれの学校生活が始まるー。

第1章・そして少年は運命に抗う・（後書き）

なんだが自分でもよくわからないので書き直すかもしれん。

第2節・チビ教師は傷つかない・（前書き）

どこかで見たことあると思うたら110！（いや、冗談ですけどネ？）

第2節・チビ教師は傷つかない・

やあ、みんなこんばんは！

おれの名前は久遠時月光！

どこにでもいるただの高校2年生さ！

なぜこんな自己紹介してるかってすこし現実逃避したかったんだ
ーハハハハハー。

ちくしょう遅刻じゃねえの！

少しだけだるそうだけど真面目な生徒K（久遠時）を目指していた
のに！

今朝のおれのバカァー！

なんやかんやで今朝から忙しい男、月光であつた。

「おい、遅刻かお前ら」

曆姉と走ってる最中に横から声が聞こえてきた。

幼いような声だが凜とした感じもある。

普通話しかけられれば反応して振り向いて確認するだろうが、おれ
たちのよく知る人物なので確認する必要はあまりない。

まあある意味でなら何度も確認したくなる人ではあるんだが。

「いえ、違います」

「そーです、愛の逃避行です！」

「それもちげえよ！？」

「あー夫婦漫才はそれくらいでいいから、行くならさっさと行かん
か」

「えへへー夫婦だつて弟君、いい響きだねっ」

この姉…惚けてやがる…！

…まあ、嬉しそудだからいいか。

「と、これ以上遅れたらマジでやばいから行くぞ曆姉」

もう一度走り出そうとして、気でも変わったのか体を逆方向に振り向かせる。

そしてそこにいる一人の女性に目を向ける。

「ん？どうした、さっさと行け」

シッシツと手をブラブラさせているその女性は小柄ながらも背筋はピンと伸びており、大人の雰囲気醸し出していた。

髪は切るのが面倒と言って切っていないため腰まで伸びている金の長髪である。

ボサボサになるのも嫌らしく、髪を一まとめにしてある、いわゆるポニーテールというものだ。

目は雰囲気からわかる通り少し強気な感じで目の色は青みがかったいる。

実はこの女性、月光の通う樺桜高校の教師なのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n90111/>

時を狩る少年

2011年6月13日00時54分発行